校長室だより NO. １９ 令和元年７月16日	# すべては光る	梅園小学校長 たかす りょうへい 高 須 亮 平

梅園再発見３１　～職人の町・祐金町の鋳物師・安藤家・木村家の盛衰

祐金町は六地蔵町、十王町と同じように本学区で珍しい名前の町名です。祐金町の区域は、専福寺、善立寺と、その南の国道１号までの一帯です。古くは城郭内にあり、横町（現・本町）の南の六地蔵、唐澤の東辺りで町名はありませんでした。祐金町の名前は現在地に移ってから専福寺の僧・祐欽から名付けられたと言われています。

まず、その専福寺について、元々の位置は岡崎城大手門の南にありました。開基は澄圓上人で、弘仁９（８１８）年、天白山の麓に太子堂と呼ばれる庵を建てました。文明２（１４７０）年、１７代・祐了が再興し能見大手門（現・材木町）に移りました。中興の祖と言われた２０代・祐欽は家康の岡崎在城の頃、茶道や連歌の相手となっていました。三河一向一揆の際に、家康に和談を勧めましたが受け入れられず失敗し、大坂の石山本願寺に立ち退きました。その後、石川家成の母妙西尼が家康に嘆願して許され、慶長６（１６０１）年に、現在の場所（榎町）に移ったと伝えられています。

現在の専福寺の概観

その後、祐欽の名から町名が祐金町と呼ばれるようになりました。当時、本多豊後守康重が岡崎城主でした。この郭内からの移転理由は、城郭拡張、郭内整理とも、また、専福寺が高い鼓楼の造りなどから見て砦のようでもあり、町の防備の要素も含んでいたとも推察されます。享保１７（１７３２）年、本堂を焼失していますが、延享２（１７４５）年、祐慶が再建しました。

江戸時代の祐金町は職人の町で、桶屋、鍛冶屋、大工などが多く住んでいました。中でも安藤家、木村家という２つの鋳物師は有名でした。鋳物師とは銅・鉄・すずなどの金属を溶かして様々な型に入れ、仏像や梵鐘（ぼんしょう）、鏡、鍋、釜などを鋳造する職人の総称でした。

安藤家は、正應２（１２８９）年、菅生町満性寺の開基・了専上人と来住した鋳物師で、満性寺領地の菅生川岸・淵上に住み鋳物師大工職を勤めていました。天文２４（１５５５）年、十代・淵上大工小法師（三郎九郎乗近）に松平元信（後の家康）家老石川忠成ら５名連署の大工職安堵状（公認書）が与えられました。これにより、戦国・江戸時代を通じ、安藤家の鋳物師としての権威付けがされました。裏面の表は、安藤家が鋳造した梵鐘・喚鐘・鰐口などの一覧です。中には火災や戦時供出などで失われたものが多くありますが、岡崎市内外、多くの寺社の梵鐘などを鋳造していたことが分かります。しかし、戦国期から近世にかけて徳川氏との縁の深い大事な梵鐘を鋳造したのは牛久保金屋の鋳造師中尾家でありました。

特に、安藤家の１３代・宗左衛門宗次が、慶長１３（１６０８）年に満性寺の梵鐘、同１８年には専福寺の梵鐘を造っています。１６代・金右衛門宗次以降も正保から享保年間（１６４５～１７３５）にかけて妙源寺（大和町）や興蓮寺（亀井町）など、現

在の岡崎市内及び近隣の梵鐘や仏具を鋳造しています。なお、現在の梵鐘の多くは戦後のものです。

専福寺の梵鐘

寛文10（1670）年、16代・金右衛門宗次は、岡崎藩水野忠良の命により御用鋳物師となり、祐金町東北側に移住し、屋敷地と田畑の所有が認められました。しかし、梵鐘や仏具の需要は恒常的にはなく、鋳造は名誉ではありましたが利の上がる仕事ではありませんでした。

安藤家は、鍋釜など日常生活品は造りませんでしたので生活は困窮し、矢作金屋小路で鍋釜を販売していた鋳物師の木村家に祐金町で鍋釜を造るように持ちかけました。そこで、木村家は元禄2（1689）年、安藤家屋敷に移り製造を始めました。享保12（1727）年には木村家に屋敷の一部を売り渡し、鋳物師2家が並列して営業することとなりました。

その後、安藤家は18代・安藤金五郎宗次が岡崎藩主の命で大砲の鋳造を試みたり、20代・宗房が安永8（1779）年、鍋釜製造を始めたりしました。24代・真形は黄銅鋳金を試み、26代・金得は幕末から明治にかけて青銅器鋳物に新手法を発揮して、籠目灯籠・籠目花瓶などの作品を生み出しました。そして、明治11（1878）年、フランスのリヨン博覧会に出品して受賞するなど美術鋳造で活躍しました。金得は明治18年に没し、鋳物師安藤家は廃業となりました。

鋳物師職之事先規
無相違之条

仍如件

木村家の鋳物師職安堵状

次に、木村家について、寛文5（1665）年、木村十左衛門が江州辻村（現・滋賀県栗東）から矢作の勝蓮寺西の金屋小路に移住してきました。そして、鍋釜の仕入れ販売をしていました。その後、安藤家の屋敷に引っ越した木村家は、安藤家の製品販売と鍋釜の生産下請けを行う中で、次々に細工場を立て直したり、蔵や職人長屋を建てたりして規模を拡大しました。そして、享保12年、祐金町の正式住人となり、能見町に一族を分家させ直販店を経営する繁盛ぶりを見せました。

文政3（1820）年、木村家は御用金の奉納などで藩の御用達商人に取り立てられ、梵鐘の鋳造・唐金細工認められました。右上がその安堵状です。これで、安藤家と同等の立場となりました。

滑信寺の釣鐘

明治天皇行在所の碑

木村家の鋳造品は、右の滑信寺（衣文観音）の釣鐘（明治14・1882年）とその作成を記した額（裏面）が有名です。その後、木村家の鋳物業は明治から大正期に繁盛しましたが、大恐慌のあおりで昭和5（1930）年に廃業となりました。

この祐金の地は稲前神社の社地で、伊勢に送る神稲を納める神蔵があり、専福寺に稲前神社舊阯の板碑があります。そのように神（天皇）との関係からか、明治9（1876）年には昭憲皇太后（明治天皇の皇后）の宿泊所となったり、明治11（1878）年には明治天皇の行在所にもなったりしました。

今回は『旧岡崎市史』『新編岡崎市史』等を参考にしました。

◎ 鋳物師・安藤家の作品年譜

	年号	所在地	銘文
	天文18（1549）年	舞木町 山中八幡宮寺鐘	藤原三郎九郎乗近
①	22（1553）年	菅生町 満性寺梵鐘	大工三郎九郎乗近
	元禄元（1558）年	真福寺町 真福寺鰐口	岡崎菅生宗次
	7（1564）年	西尾市 御剣神社鰐口	菅生大工藤原宗次
	慶長13（1608）年	菅生町 満性寺梵鐘	安藤宗左衛門宗次
	17（1612）年	六供町 甲山寺鰐口	安藤藤左衛門
②	18（1613）年	祐金町 専福寺梵鐘	藤朝臣淵上安藤左衛門宗次
	正保2（1645）年	豊田市 行福寺梵鐘	大工安藤金蔵宗次
	慶安3（1650）年	西尾市 善福寺梵鐘	菅生村藤原朝臣安藤金右衛門宗次
③	5（1652）年	大和町 妙源寺梵鐘	菅生郷安藤金右衛門宗次
	明暦3（1657）年	岩津町 信光明寺鐘	大工安藤金右衛門藤原宗次
④	万治3（1660）年	亀井町 興蓮寺梵鐘	大工藤原金右衛門
	寛文元（1661）年	知立市 万福寺梵鐘	大工岡崎藤原朝臣安藤金右衛門宗次
⑤	5（1665）年	中島町 浄光寺梵鐘	岡崎住大工安藤金右衛門藤原宗次
⑥	8（1668）年	明大寺町 万徳寺梵鐘	大工藤原氏安藤金右衛門宗次
	延宝6（1678）年	刈谷市 楞源寺梵鐘	岡崎住大工藤原氏安藤金右衛門宗次
	6（1678）年	西尾市 願正寺梵鐘	岡崎安藤金右衛門宗次
	元禄11（1698）年	伊賀町 伊賀八幡宮鐘	大工安藤金右衛門宗次
	宝永2（1705）年	西尾市 慶昌寺梵鐘	安藤金右衛門
	4（1707）年	豊田市 隣松寺梵鐘	安藤金右衛門
	享保12（1727）年	吉良町 西福寺梵鐘	岡崎安藤……
	享保年間	吉良町 正向寺梵鐘	
	寛保元（1741）年	中町 極楽寺梵鐘	菅生住安藤金右衛門宗次
	安永7（1778）年	明大寺町 成就院喚鐘	安藤金右衛門藤原宗敷
	文化元（1804）年	吉良町 妙隆寺喚鐘	岡崎住安藤金右衛門藤原宗履
	文政13（1830）年	西尾市 西林寺喚鐘	岡崎菅生安藤金右衛門
	天保12（1841）年	豊田市 浄願寺梵鐘	岡崎安藤金右衛門藤原真形
	14（1843）年	吉良町 正法寺灯籠	安藤金右衛門真形
	文久元（1861）年	名古屋市 福正院水盤	岡崎住安藤金右衛門宗賢
⑦	3（1863）年	下青野町 養源寺喚鐘	岡崎安藤金右衛門宗賢

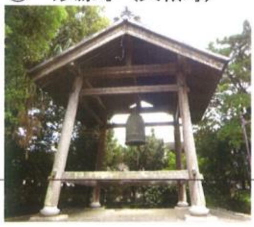
◎ 現在の岡崎市の鐘

次に示す岡崎市の安藤家が造った釣鐘については、多くは戦時中に供出し、戦後、新たに造られたものです。しかし、木村家が造った渭信寺（上衣文町）の梵鐘は、戦前のもの（明治14年）のものと分かっています。

① 満性寺（菅生町）

② 専福寺（祐金町）

③ 妙源寺（大和町）



③ 信光明寺（岩津町）

⑤ 興蓮寺（亀井町）

⑥ 浄光寺（中島町）

⑦ 万徳寺（明大寺町）

⑧ 養源寺（下青野町）

◎ 渭信寺の梵鐘を造る様子を描いた額

これは、梵鐘の鋳造作業を描いたものとしては珍しいものと言われています。これから鋳造作業の詳細を見ることができます。

製造者は木村家の木村善輔、弟の繁造でしたが、その応援者として、太田庄造（西尾・平坂）、安藤金得（岡崎）、中尾十郎（豊川）、水野太郎左衛門（名古屋）、阿保市太夫（伊勢）、田中太五良（浜松）をはじめ、百余名を数えています。